

蘇軾と黄庭堅

— 書に対する見解を比較して —

長尾 秀 則

- 一、はじめに
- 二、人生における「書」
- 三、学書過程
- 四、「書」の価値基準
- 五、「書」の入神方法
- 六、自己の書に対する評価
- 七、相手の書に対する評価
- 八、結 言

蘇軾と黄庭堅——「蘇・黄」と並称され、書道史の上で、意を重視する立場（人間の個性を重視する立場）の代表として、常に一つのまとまったものとされてきた二人であるが、その書道観（書に対する見解）を比較してみると、共通点と共に、多くの相異点が存在する。従来、両者の詩の方面に関する研究はかなり以前からなされていたが、書に関する方面の研究は、まだそれほどなされてはおらず、二人の比較が論じられることも、それほど多くはないように思われる。

本稿は、主に題跋中に表れた、蘇軾と黄庭堅の書道観の共通点と相違点を探り、同じ革新派と言われながら、大きく作風が異なる原因を究明しようと試みている。

一、はじめに

宋代の書は、大きな流れの上から言えば、北宋の、蘇軾（一〇三六～一一〇一）・黃庭堅（一〇四五～一一〇五）・米芾（二〇五一～一一〇七）・蔡襄（一〇一二～一一〇六）の四家によって代表される。このうち蔡襄は（蔡は蔡京説あり）、王羲之流の典型的な書をよくした人物であり、宋代の、「意を取る」という特色からは、はづれる点がある。また米芾も、王羲之をはじめとする晋人の筆法を重視した人物で、伝統派に属す。よって、蘇軾と黃庭堅こそが、顏真卿によって打ちたてられた革新的な書風を代表すると言える。

しかし、蘇軾と黃庭堅、今日伝わる両者の作品はまったく異なり、われわれは大きな差異を感じずにはいられない。同じ革新派と言われながら、このような差異が出てくるのはいったいどうしてであろうか。筆者は、両者の間に書家としての経験、書に対する思考方法に違いがあるためと考える。

小稿では、主に題跋中に表れた、蘇軾と黃庭堅の書道観（書に対する見解）の共通点と相違点を探ってみたい。

なおテキストは、津逮秘書本『東坡題跋』・『山谷題跋』を底本とし、真蹟の存するものは、それを参照し、他の諸

本によって校勘を行った。また、旧字体は、新字体のあるものについては、改めた。

以下、蘇軾と黃庭堅の「書」に対する見解を比較してみよう。

二、人生における「書」

二人の人生の中で、書はどのような意味を持っていたのであろうか。まず、蘇軾からみてみよう。彼は、二度の流謫生活を送っている。蘇軾は新法党と旧法党との政争に苦しみつつも、その中で自己の思想・文学・芸術を深めたのである。「筆陣図に題す」（『東坡題跋』）の一則では、

筆墨之迹、託於有形。有形則有弊。苟不至於無、而自樂於一時、聊寓其心、忘憂晚歲、則猶賢於博奕也。雖然不假外物、而有守於內者、聖賢之高致也。惟顏子得之。

（筆墨の迹は、形有るに託す。形有れば則ち弊る有り。苟くも無に至らずして、自ら一時を楽しみ、聊か其の心に寓して、憂を晩歲に忘るれば、則ち猶ほ博奕に賢るなり。然りと雖も外物に仮らずして、内に守り有る者は、聖賢の高致なり。惟だ顏子のみ之を得たり。）

として、「もしこの世に生きながらえて束の間の人生を樂

しみ、しばらく書に心を寄せて、老いの憂いを忘れることになれば、それはすこくや困窘をするよりましである。」
「書は暇を楽しみ、時間をむだにしないためのもの」との見解を示している。

「舟中に字を作るを書す」（『東坡題跋』）の一則では、
將至曲江、船上灘歇側。撐者百指、篙声石声皦然。四顧皆滄瀨、士無人色。而吾作字不少衰何也。吾更変亦多矣。置筆而起、終不能一事、孰与且作字乎。

（將に曲江に至らんとするに、船、灘に上りて歇側す。撐者百指し、篙声・石声、皦然たり。四顧すれば皆滄瀨にして、士人色無し。而るに吾字を作りて少しも衰へざるは、何ぞや。吾、更変することまた多し。筆を置きて起ち、終に一事を能くせざれば、且く字を作るに孰与ぞや。）

として、「ちようど曲江に到着しようとするころ、船が早瀬にのりあげて横に傾いた。船頭はあれこれと指図し、竿と石がぶつかる音がひときわさわがしい。あたりをみわたせば一面が波立つ早瀬で、人々は顔色がなくなっている。しかし、私は字を書き続けて、少しも顔色が変わらなかつたのはどうしてだろうか。私はこれまでに劇変する人生を多く経験していたからである。もし筆を置いて立ちあがったとしても、結局何もできないのであるから、さしあたり

字を書いていた方がよいのである。」——（蘇軾は、どうすることもできない境遇の中では、無駄に動きまわるよりも、字を書いて時をすごし、心を安らかに保ちたい）との立場をとっている。

この二則から共通に感じられることは、求道的、芸術至上主義的に書をとらえていないということである。換言すれば、どちらかというところ、さめていいるというか、手すさびとして書をとらえているということである。「舟中に字を作るに書す」（『東坡題跋』）の則は、『蘇文忠公詩編注集成総案』巻四十四では、元符三年（一一〇〇年、蘇軾六十五歳）十二月初めのこととしており、海南島から北帰する蘇軾の当然の境地と思われる。

これに対し、黃庭堅も新法に反対し、五十歳以後、長期にわたり左遷の地（黔州・戒州・宜州）で過ごしている。

しかし、『山谷題跋』に収められている二文によれば、蘇軾ほど左遷地での生活に、苦痛を感じていないことが理解できる。「自ら草秋浦の歌後に書す」（『山谷題跋』）の一則では、

紹聖三年五月乙未、新開小軒、聞幽鳥相語。殊樂戲作草、遂書徹李白秋浦歌十五篇。

（紹聖三年五月乙未、新しく小軒を開き、幽鳥の相語るを聞く。殊に楽しみて戯に草を作り、遂に李白の秋

浦の歌十五篇を書徹す。

とある。紹聖三年（一一〇九六年）は、黃庭堅五十二歳にあたり、黔南に在った。「新しく小軒を開き、幽鳥のさえずりを聞くことができた。特別に楽しくなつて草書を書きたくなり、李白の秋浦歌十五篇を一気に書き通した。」——新築した小軒での楽しい書作場面にもみまがう一文である。人生にあまり苦痛を感じていないためか、こと書に對する見方も、蘇軾とは趣を異にする。「自作の草後に書す」（『山谷題跋』）の一則では、

紹聖甲戌、在黃龍山中、忽草書三昧。覺前所作太露芒角。若得明窓淨几、筆墨調利、可作數千字不倦。但難得此時會爾。

（紹聖甲戌、黃龍山中に在りて、忽ち草書三昧を得たり。前の作る所、太だ芒角を露すを覺る。若し明窓淨几、筆墨調利を得ば、數千字を作るも倦まざる可し。）とある。紹聖甲戌（一一〇九四）、「もし明窓淨几にむかい、よく書ける筆墨がそろつたならば、數千字書いてもあきないであろう。ただそうした機会がなかなか得がたいだけなのだ。」——（条件さえそろえば、書（草書）をあきることなどない。）と、より書に對し、意欲的な面をみせている。さめているところなど、みじんもない。しかし、どちらかというと、全体的にみて、題跋中に自己の人生における書

という観点で書かれた文章はあまりみあたらないのも事実である。

三、學書過程

では次に、人が書を学ぶ過程をどのように考えているかをみてみよう。

蘇軾は、「陳隱居の書に跋す」（『東坡題跋』）の一則で、陳公密、出其祖隱居先生之書相示。……〈中略〉……書法備於正書、溢而為行草。未能正書、而能行草、猶未嘗莊語、而輒放言。無是道也。

（陳公密、其の祖の隱居先生の書を出だして相示す。……〈中略〉……書法は正書に備はり、溢れて行・草と為る。未だ正書を能くせずして、行・草を能くせんとするは、猶ほ未だ嘗て莊語せずして、輒ち放言するがごとし。是の道無きなり。）

とし、「書法はすべて楷書に備わっており、それが発展して行書・草書になるのである。まだ楷書がうまく書けないのに、行・草をうまく書くことができるようにするのは、あたかも真面目な議論を初めからせず、やたらに勝手気ままなことを言うようなものである。」——〈書は、楷書・行書・草書の順に學習すべきである。〉との見地を示して

いる。また、「唐氏の六家の書の後に書す」(『東坡題跋』)では、草書が上手であるのに、楷・行のうまくない人を非難している。

一方、黄山谷は、歴代の書家の中でも、もつとも克明に学書経験をたどれる人物である。書体についての学習順序についての記述は、「張載熙に与ふるの書巻の尾に跋す」

(『山谷題跋』)に、

凡学書欲先学用筆。用筆之法、欲双鉤回腕、掌虚指実、以無名指倚筆則有力。古人学書、不尽臨模。張古人書於壁間、觀之入神、則下筆時隨人意。字字既成、且養於心、中無俗氣。然後可以作示人為楷式。凡作字、須熟觀魏晉人書、會之於心、自得古人筆法也。欲学草書、須精真書、知下筆向背。則識草書法。草書不難工矣。

(凡そ書を学ぶには先ず用筆を学ばんことを欲す。用筆の法は、双鉤回腕、掌虚指実ならんと欲す。無名指を以て筆に倚せれば、則ち力有り。古人、書を学ぶに尽くは臨模せず。古人の書を壁間に張り、之を觀て神に入れば、則ち筆を下す時、人意に随ふ。字を學んで既に成り、且つ心を養いて中に俗氣無からしむ。然る後に作りて以て人に示して楷式と為す可し。凡そ字を作るには、須く魏晉人の書を熟觀し、之を心に會し、古人の筆法を自得すべし。草書を学ばんと欲せば、須

く真書に精にして、下筆の向背を知るべし。則ち草書の法を識らん。草書は工なること難からず。)

とある。この則は、黄庭堅の書に対する考え方を探る上で核となるものである。用筆にこだわる点は、蘇軾にはみられない大きな特徴である。黄庭堅は、ほとんど全人格をかけ、筆法(特に草書)の鍛練を持續した。「草書を学ぼうと思えば、楷書を熟知し、下筆の向背を知らねばならない。そうすれば草書の法はわかるのである。草書に巧みになることもそんなに困難ではないのである。」——〈草書の学習には、楷書を熟知すべき。〉との見地を示している。この点は、蘇軾の考えにも通じるものがある。ただ、用筆を重視し、精神を養い、心中の俗氣をなくすことの方がより重点的に考えられているようである。

四、「書」の価値基準

では、次に、どういった書を良いと考えたのかをみてみよう。

蘇軾は、「楊子の蔵する所の歐・蔡の書を評す」(『東坡題跋』)で次のように述べている。

自顏柳氏没、筆法衰絕。……〈中略〉……。歐陽文忠公書、自是學者所共儀刑、庶幾如見其人者。正使不工、猶當伝宝。況其精勤敏妙、自成一家乎。……〈下略〉

……。

（顔・柳氏の没せしより、筆法は衰絶す。……〈中略〉……。歐陽文忠公の書、自ら是れ学ぶ者の共に儀刑する所、其の人を見るが如きに庶幾き者なり。正使ひ工ならざるも、なほ当に伝宝すべし。沉んや其の精勤敏妙にして、自ら一家を成すをや。）

これによれば、「歐陽脩の書は、学問をする者がみな手本としているものであり、その人をまのあたりに見る思いがする。たとえその書が巧みでなくても、世に伝えて宝とすべきものである。まして、その書が、書にいそしんで巧妙おのずから一家の書風をなしているなら、なおさらのことである。」とされていることから、〈書は必ずしも技術的にすぐれたものでなくてもよい。〉とする考え方をうちだしている。これは、人格を技術（筆法）の上に置く考え方である。「欧陽の帖に題す」（『東坡題跋』）の一則でも、同様の考え方がみられる。欧陽脩は、蘇軾の師だからことさらにそうしたとも取れるが、いずれにしても唐代の書論とは異なる、宋代的な考え方がここに述べられている。技術や、その技術に支えられた形の美しさのみにとらわれることなく、高い人格がその書に表現されることを求めたのである。蘇軾が、書の古典を広く探りながらも、最終的には、自己の意を基礎として芸術を作りあげていることを考えあわせ

ると納得できるのではないだろうか。また、ここで注意しなくてはいけないのは、人格を重視しているが技術をすべて否定しているわけではない点である。書がよりよいものであるためには、書の技術に習熟することも必要としている。しかし、一方で、「我が書は意もて造りたれば本より法無し。」（石蒼舒醉墨堂詩）とか、「苟しくも能くその意に通ずれば、常に謂へらく学ばずとも可なり。」（次韻子由論書詩）といい、筆法をそれほど重視していなかったのも事実なのである。

一方、黄庭堅も、人間性を大事にしてはいるが、先ほどあげた「張載熙に与ふるの書巻の尾に跋す」（『山谷題跋』）にあるように、蘇軾と逆で、技術（筆法）を人格（精神）の上に置く考え方を示し、「およそ書を学ぶにはまず用筆を学びたいものだ。」とし、「字を学んだらさらに精神を養い、心中の俗気をなくすのである。その後、字を作れば人にお手本として示すことができる。」と言っている。技術（筆法）にこだわる点は、蘇軾と決定的に異なる点である。そして、この一則が、努力に努力を重ねて到達した、黄庭堅の最晩年の境地である点は、興味深い。

しかし、技術を重視する黄庭堅ではあるが、ことに師の蘇軾に対しては、その人間性を高く評価し、深く敬意を払っている。「東坡の書せる遠景楼賦の後に跋す」（『山谷題

跋」]では、次のように言っている。

東坡書、随大小真行、皆有斌媚可喜処。今俗子喜譏評東坡。彼蓋用翰林侍書之繩墨尺度。是豈知法之意哉。

余謂東坡書、學問文章之氣、鬱鬱芊芊、發於筆墨之間。此所以他人終莫能反爾。

(東坡の書、大小真行に随ひ、皆な斌媚喜ぶ可き処有り。今、俗子喜んで東坡を譏評す。彼、蓋し翰林侍書の繩墨尺度を用ふ。是れ豈に法の意を知らん哉。余、謂へらく、東坡の書は、學問文章の氣鬱鬱芊芊として筆墨の間に発す。此れ他人の終に能く及ぶ莫き所以なるのみと。)

當時の俗人たちが東坡の書を非難することに対し、「私が思うには、東坡の書というものは、學問や文章の氣が、さかんに筆墨の間にほとばしり出ているのであり、そうした点こそが、他人がどうしても及ぶことのできない所のものなのである。」——黄庭堅も、蘇軾の人間性を高く評価し、その人間性の発露である書を、認めていたのである。しかし、黄庭堅が評価したのは、蘇軾の楷書と行書である。草書についてここに記されていないのは、評価しがたい何かがあったのであろうか。自己の草書に対する自負が裏にあったように思われる。実際、黄庭堅の立場から見ると、蘇軾の書は雑にみえるらしく、蘇軾の大字について、俗氣の

無い点を称えながらも、筆使いの上手でない点を指摘している。

五、「書」の入神方法

では、書というものは、いったいどのようにすれば、精神性の高いすぐれた書が書けるようになるのであろうか。蘇東坡の見解からみてみよう。「魯公の書草に題す」(「東坡題跋」)では、次のように述べている。

昨日長安師文、出所藏顏魯公与定襄郡王書數紙。比公他書、尤為奇特。信手自然、動有姿態、乃知瓦注賢於黄金、雖公猶未免也。

(昨日、長安の安師文、藏する所の顏魯公が定襄郡王に与ふる書草數紙を出だす。公の他書に比べて、尤も奇特と為す。手に信せて自然、動きに姿態有り、乃ち瓦注の黄金に賢るは、公と雖も猶ほ未だ免れざるを知るなり。)

これによれば、「この書(争座位稿)」は、顏真卿の他の書にくらべて、非常にすぐれていると思う。手にまかせて自然のままに書かれ、動きに姿態がある。そこで、瓦をかけて勝負をする者は、黄金をかけて勝負をする者よりも上手にやつのけるが(草稿であるため自由に書けて、そのためすぐれた書ができあがったこと)、顏真卿ほどの人で

あつても、まだそうした状態から出られないでいたことがわかる。」としている。ここでは、うまく書こうという意識がなかったために、かえつてうまく書くことができたとし、へ書は、無理のない自然なものを第一とし、自由な内的精神が必要との見解を示している。

また、「草書を評す」(『東坡題跋』)でも、

書初無意於嘉、乃嘉爾。……〈下略〉……。

(書は初めより嘉くせんと意ふこと無ければ、乃ち嘉なるのみ。……〈下略〉……)

とし、「書は、うまく書こうという気持ち少しも無ければ、うまく書ける。」と、明言している。やはり、ここでも技術的な面ではなく、精神的な面をより重視している点は、当然ながら注目すべきであろう。

これに対し、黃庭堅は、王羲之などについて書いている則をみると、精神的な面を重視していると思われるのだが、「絳本法帖に題す」(『山谷題跋』)には、

心能転腕、手能転筆。書字便如人意。古人工書、無它異。但能用筆耳。元豊八年、夏五月戊申。趙正夫出此書於平原官舍。会観者三人。江南石庭簡、嘉興柳子文、豫章黃庭堅。

(心能く腕を転じ、手能く筆を転ず。字を書するに便ち人意の如し。古人の書に工なるは它異無し。但だ用

筆を能くするのみ。元豊八年、夏五月戊申。趙正夫、此の書を平原の官舎に出だす。会観せる者三人。江南の石庭簡、嘉興の柳子文、豫章の黃庭堅。)

とある。「心がよく腕を引きまわし、手がよく筆をはこぶ。字を書くのにまるで人意のごとくに自然にまかすのである。古人が書に巧みであるのは、他でもない。ただ用筆を能くするということだけなのである。」——まるで心も技のうちというか、心と技が一体となり自然となるまで用筆を究めなくてはいけないとしている。つまり、〈心〓技〓自然〉となったとき、精神性の高いすぐれた書ができる」としてある。ある意味で、蘇軾の考えを継承しつつも、もう一步考えを發展させているように思われる。しかし、具体的な学習法として、「書して福州の陳継月に贈る」(『山谷題跋』)で次のように言っている。

……〈中略〉……。學書時時臨摹、可得形似。大要多取古書、細看令人入神、乃到妙處。唯用心不雜、乃是入神要路。

(書を学は時時臨摹し、形似を得可し。大要、多く古書を取りて、細に看て神に入ら令めば、乃ち妙処に到る。唯だ心を用ひて雜ならざれば、乃ち是れ入神の用路なり。)

つまり、「書を学ぶには、時々臨模して形似を得なければ

ならない。大切なことは多く古書を手にとつて、細かくこれを見、心に会得させることである。そうすれば妙境に到りうるのである。」とし、「ただ心だけを用いて雑念をはらうことが、入神の要路なのである。」とする。この一則には、技術的なことは述べられておらず、黃庭堅の考える、学書の正しい方法が述べられている。雑念をはらうことを、入神の条件としている点は、蘇軾の考えに通じる。一見、則により、考えに乱れがあるように思われるが、黃庭堅の場合、心と技は、一体ととらえられていると考えれば、納得がいくのではないだろうか。

六、自己の書に対する評価

では、それぞれ、自己の書について、どのように考えていたのであろうか。蘇軾は、「草書を評す」(『東坡題跋』)で、次のように言っている。

……吾書雖不甚佳、然自出新意、不踐古人。是一也。
(吾が書、甚だしくは佳ならずと雖も、然して自ら新意を出だし、古人を踐まず。是れ一の快なり。)

とし、「自分の書(草書)はそれほどよいとはいえないが、自分で新しい意趣を打ち出し古人の真似ごとをしていない。その点が一つの喜びである。」とし、謙遜しながらも、自信のほどを示している。蘇東坡は、伝統的な書き方を守り

つづけるだけでは満足せず、伝統的な良い物を内に持ち、同時にまた新しい内容をもその書に求めた人である。伝統的な王羲之の書を高く評価するとともに、彼は中年には顔真卿を愛好し、顔真卿が、伝統的な筆法を一変した点を高く評価している。芸術は人間の価値でその価値が決まると主張し、「俗」であつてはならないことを多くの題跋で強調する。なお、蘇軾は筆法をそれほど重視していなかったとはいえ、それなりに努力はしているのであり、無視してはいない点は、おさえておく必要があるう。

一方、黃庭堅は、自己の否定をたえずしていたことが伺える。例えば、「右軍の文賦の後に書す」(『山谷題跋』)では、次のように言っている。

余在黔南、未甚覺書字綿弱。旧移戎州、見旧書多可憎。大概十字中有三四差可耳。今方悟古人沈著痛快之語。但難為知音爾。……(下略)……。

(余、黔南に在りしとき、未だ甚だしくは書字の綿弱なるを覺えず。戎州に移るに及び、旧書を見るに多く憎む可し。大概十字の中、三四差や可なるもの有るのみ。今方に古人の沈著痛快の語を悟る。但だ知音為り難きのみ。)

とし、「私は黔南にいたころには、まださほど書いた字が弱いということに気づいていなかった。戎州に移ってから、

昔の書を見ると多くの場合気に入らぬものばかりである。たいてい十字のうち三、四字がややましなくらいである。現在では古人の「沈著痛快」(おちついていて、こころよいこと)の語を悟ったが、真に心を知る友とはなりがたいのである。」——これによれば、黔州、戎州でそれぞれ自己の書に対する見方の変化があつたことがわかるが、この例に限らず、黃庭堅の題跋全体に、こういった口調はみられる。常に自己の書に満足していないで、変転・変化を求めている姿がみうけられるのである。こういった傾向は、自信の持ち方にも表れており、「旧書の詩巻に跋す」(「山谷題跋」)では、

建中靖国元年十二月甲午。觀此詩卷。筆意癡鈍、用筆多不到、亦自喜中年來、書字稍進耳。星家言、六十二不死、当寿八十余。審如此、真当以善書名四海。

(建中靖国元年十二月甲午。此の詩巻を觀る。筆意、癡鈍にして、用筆多く到らざるも、亦た自ら中年來、書字稍^やや進むを喜ぶのみ。星家言ふ、「六十二にして死せざらば。當に寿、八十余なるべし。」と。審に此の如くんば、真に當に書を善くするを以て、四海に名あるべし。)

とし、中年以降、書がやや上達してきたことを喜び、「星占いをする者が、『六十二歳で死ななければ、寿命は八十

余歳まであるだろう。』と言ったが、まことに彼の言うとおり長生きしたら、私は能書をもって天下に名をのこすだろう。」と、将来を期して、自信を表出させている。因みに、この則を書いたのが、一一〇一年十二月であり、黃庭堅が五十七歳の時である。奇しくも、彼は一一〇五年、六十一歳で亡くなっている。晩年の代表作、「黃州寒食詩卷跋」(一一〇〇年七月)・「伏波神祠詩卷」(一一〇一年五月)・「松風閣詩卷」(一一〇二年九月)が、ほぼこの則を書いた頃にあたり、これらの作品に、黃庭堅は自負を持っていたであろうことが想定される。

七、相手の書に対する評価

さて、最後に、蘇軾と黃庭堅は、それぞれの書に対し、お互いどのような評価をしていたのかについて、みてみたい。

蘇軾は、黃庭堅の草書への邁進に対し、良くは思っていない。なかったようである。「黃魯直の草書に跋す」(「東坡題跋」)では、

草書祇要有筆。霍去病所謂不至学古兵法者為過之。魯直書去病穿域蹋鞠。此正不学古兵法之過也。学即不是、不学亦不可。子瞻書。

(草書は祇に筆^{すま}有るを要す。霍去病^{かくきやう}の所謂、古の兵法

を学ぶに至らざる者は、之を過てりと為す。魯直の書は、去病の域を穿ちて蹶鞠するがごとし。此れ正に古の兵法を学ばざるの過りなり。学べば即ち是ならず、学ばざるも亦た可ならず。子瞻書す。

といい、黄庭堅の草書は自己の才能をたのみすぎ、古の兵法を学ばなかつた霍去病に等しいあやまちであると非難している。また、「魯直の王晋卿の為に爾雅を小書するに跋す」〔東坡題跋〕では、

魯直以平等觀作欵側字、以真実相出游戯法、以磊落人書細碎事。可謂三反。

（魯直は平等觀を以て欵側の字を作り、真実相を以て游戲の法を出だし、磊落の人を以て細碎の事を書す。

三反と謂う可し。）

といい、「魯直（黄庭堅）は平等觀をもちながら傾いた字を書き、真実相を体しながら遊戲的な技法をあらわし、磊落な人柄でありながら、こまごましたことを書く。三つの矛盾と言ふべきであろう。」——つまり、人物と、書とに三つの矛盾があると、断言している。蘇軾にとつて、書は道を自覚するためのものであり、こういった黄庭堅の書作態度が理解できなかったと思われる。詩についてみても蘇軾の詩には典故の使い方が意向に沿って自然であるのに対し、黄庭堅は、典故を多用し、典故を用いた奥深さを追い

求めすぎた。そのため、意が言葉にわざわいされ、性情が充分表現されない傾向がある。自己中心的な求道の姿が黄庭堅を特色づけるものであり、詩にも、書にもそれが表出していると思われ、蘇軾にとつてそれは、矛盾として理解されたのではないだろうか。

一方、黄庭堅は、蘇軾の書に對し、基本的に尊敬の念を持っている。例えば、「東坡の墨迹に跋す」〔山谷題跋〕では、

東坡道人、少日学蘭亭。故其書姿媚、似徐季海。至酒酣、放浪意忘工拙。字特瘦勁、廼似柳誠懸。中歲喜学顏魯公楊風子書。其合処不減李北海。至於筆円而韻勝、挾以文章妙天下、忠義貫日月之氣、本朝善書、自当推為第一。數百年後、必有知余此論者。

（東坡道人、少き日蘭亭を学ぶ。故に其の書、姿媚にして徐季海に似たり。酒酣に至つて、意を放浪し工拙を忘る。字、特に瘦勁にして廼は柳誠懸に似たり。中歲、喜んで顏魯公・楊風子の書を学ぶ。其の合処、李北海に減ぜず。筆円にして韻勝り、挾むに文章、天下に妙に、忠義、日月を貫くの氣を以てするに至つては、本朝の書を善くするもの、自ずから當に推して第一と為すべし。數百年後、必ず余の此の論を知る者有らん。）

と評し、「東坡道人は若いとき蘭亭序と学んだので、書が姿媚で、徐浩に似ている。酒に酔つてくるとリラックスして字の工拙を忘れ、とりわけやせてつよい良い字となり、柳公権に似てくる。中年には喜んで顔魯公・楊凝式の書を学んだ。このころの書のよくできたところは李邕におとらない。筆円やかに韻勝れ、さらに文章は天下に妙に、忠義心は日月をも貫くほどの氣概をもっているという点にいたっては、本朝の能書家は東坡をもつて第一とすべきである。数百年ののちには、必ず私のこの意見を理解する者があるであろう。」と、絶賛している。蘇軾の字書経験を述べ、筆使いや、韻にすぐれている点をあげ、その人物を評価し、その自己の評価に対する評価を将来にゆだねる点は、黄庭堅らしいと言えよう。

しかし、すべての点で蘇軾の書を敬慕したわけではない。筆法を重視した彼からすると蘇軾の書は雑にみえたところもあったらしい。「東坡の小子両軸卷の尾に題す」(『山谷題跋』)では、

此一卷、多東坡平時得意語。又是醉困已過後書。用李北海徐季海法。雖有筆不到處、亦韻勝也。

(此の一卷、東坡、平時得意の語多し。又是れ醉困已に過ぐる後の書なり。李北海・徐季海の法を用ふ。筆の到らざる処有りとも、亦た韻勝れるなり。)

とし、「筆の到らない所があるけれども、韻は勝れている。」と、韻の勝れている点を称えつつも、筆使いの上手でない点を指摘している。(因みに、「韻」は、黄庭堅における書の評価基準として、筆法以上に求められる最大の要件であると考えられる。「韻」がすぐれるとは、耳を澄して聴くに耐え得る作品ということである。)しかし、蘇軾にしてみれば、わずかな技術的欠点は気にならない存在であったのである。

八、結 言

蘇軾と黄庭堅——「蘇・黄」と並称され、意を重視する立場、すなわち人間の個性を重視する立場の代表として従来、常に一つのまとまったものとされてきた二人であるが、書道観を比較してみると、共通点と共に、多くの相異点も存在した。また二人はともに書家としてだけでなく、詩の方でも「蘇・黄」と並称され、宋を代表する詩人として知られる。従来、詩の方面の研究はかなり以前からなされていたが、書の方面の研究は、まだそれほどなされてはおらず、二人の比較が論じられることも、それほど多くはないように思われる。

以下、管見により判明した事項をまとめる。
一、蘇軾は、より文人的に書をとらえ、技術にあまりこだ

わらず、人間性を重視したこと。

一、黄庭堅は、より芸術家的に書をとらえ、人間性も大切にしながら、技術を重視し、韻を大切にしたこと。

一、蘇軾も黄庭堅も、共に楷書を重視し、それを基礎と考えたこと。ただし、黄庭堅は、草書にその精力を傾けていたこと。

一、精神性の高い書を書くために、蘇軾は、「うまく書こうという気持ちが少ないも無ければ、うまく書ける。」と、精神面を強調したこと。

一、精神性の高い書を書くために、黄庭堅は、「心と技が一体となり自然となるまで用筆を究めなくてはならない。」と、精神面と共に、技術（用筆）面を強調したと。

一、蘇軾は、自己の書（草書）に新しい意趣を打ち出し、古人に追従していない点に自信を持っていたこと。

一、黄庭堅は、中年以降の書（草書）に自信を持っていたが、常に自己の書に満足しておらず、変転・変化を求めていたこと。

一、蘇軾は、黄庭堅の草書への邁進に対し、良くは思っておらず、人物と書との間に矛盾を感じていたこと。

一、黄庭堅は、蘇軾の書に対し、基本的に尊敬の念を持つてはいたが、技術面ではあまり評価していなかったこと。

以上の点がすべてではないにしても、蘇軾と黄庭堅の作風に大きく影響し、同じ革新派と言われながら、書風を異にする原因になったのではないだろうか。

（注）

○解説の参考としては左を利用した。学恩に対し謝意を表したい。

・『中国書論大系』第四卷・宋1（二玄社・一九八一・中田勇次郎編）所収「東坡題跋」（杉村邦彦訳）

・『東坡題跋——書芸篇』（木耳社・一九八九・高畑常信訳）

・『中国書論大系』第四卷・宋1（二玄社・一九八一・中田勇次郎編）所収「山谷題跋」（足立豊訳）

・『黄庭堅』（二玄社・一九九四・中田勇次郎著）

